

□9月3日 主日礼拝説教短縮版(隅野徹牧師)
「お返しができない」(ルカ14:7～14)

この箇所を深く味わうために前提となる大切なこと、それは「このたとえが処世術を私たちに教えるためになされたのではない」ということです。つまり「宴席では下座に座りなさい」とか「食事に招待するなら、次に奢り返してもらえような人を呼ぶのではなくて、お返しができない人を呼びなさい」ということを私たちに伝えるためにこの箇所があるのではない、ということです。

このときイエスが譬え話を通して教えられた直接の相手は「ファリサイ派の議員や律法学者たち」です。この人たちはお互いに持ちつもたれつで、「この前は、だれだれさんに会食に招いてもらったから、今度は自分が招こう」など、宴三昧ができた人たちです。仲がよいのはよいことです。招待し合い交流を深めることも悪いことではありません。しかし彼らには抜けていることがありました。それは弱く貧しいものたちへの配慮、神への本当の意味での遜りです。この世で力をもっている自分たち同士で、持ちつ持たれつしておけば当分安泰だ。自分たちの今の立場を脅かすような存在など、とくにはない…そんな感じでしよう。

しかし主イエスはこんなわがままな「勘違いした人たち」をも、正しい道に立ち帰らせようと、必死に招かれているのです。だからこそ今回の箇所で、彼らに対してその勘違いから抜けさせ、本当の意味で幸いな生き方に導くために、教えをなさっているのです。「あなたたちが本当に恐れなければならないお方は、あなたに命を与え、あなたの罪を特別に赦すことのできる、私の父お一人であるのだ。そのお方に対してあなたはお返しができないことを忘れてはならない。ただいただいた恵みを感謝して受ける、そんな遜った生き方をすること、それが幸いな生き方だ。」そのように神の前に遜り、隣人を本当の意味で愛する幸いな生き方に立ち帰らせようとイエスは愛をもって、自分が恐れる世の権力者を接待し合う人たちに、悔い改めを促しておられるのです。(終)